

* ロケット S-520-8CN 実験記録写真のデジタル取り込み

1987年2月22日午前1時15分鹿児島県内之浦の宇宙科学研究所鹿児島宇宙空間観測所から1基のロケットが打ち上げられた。このロケットはS520-8CN号機といった。

このロケットには乙女座銀河団の真空紫外領域(140~200nm)での撮像観測を行うGUVと呼ばれる2本の望遠鏡と、同領域の星の紫外強度を観測すると同時にロケットの姿勢決定のためのSUVと呼ばれる2本の望遠鏡が搭載されていた。

どのような銀河で星の生成が盛んであるかは、銀河、及び宇宙の構造を理解するうえで重要な問題である。銀河の活動度を示す指標の一つとして若い星O、B型星の銀河内の存在比がある。可視領域では、各々の星が分解されない限り、中、晩期型星からの光の寄与が大きく、O、B型星の存在の様子はつかめない。しかし、Wienの領域にはいる短波長側で見れば、中、晩期型星の放射は急に落ちるので、200nmより短波長の真空紫外領域で観測すれば、銀河の全光量の測定から、O、B型星の存在が調べられる。このロケット実験による観測は真空紫外領域での乙女座銀河団内の個々の銀河の絶対放射量を2次元撮像系により求めることであった。

この観測実験の主メンバーは、実験主任が宇宙研の奥田先生、観測のPIの小平桂一、他田中済、渡辺鉄哉、尾中敬、真空紫外領域分光実験室から山口朝三、中桐正夫、東大大学院生の渡部潤一、京都大学から仲野誠、辻村であった。ロケット打ち上げ成功の朝、観測班の記念写真である(写真1)。



写真1 左から渡辺、辻村、中桐、仲野、小平、尾中、山口、渡部、田中

今回デジタル化して収蔵した S520-8CN ロケット実験の記録写真は、中桐が撮影したもので、35mm フィルム 21 本分である。こういった記録写真も今までは、その観測グループの誰かが撮影し、その時点では後生大事に保管されているが、時間が経つと胡散霧消していたものと思われる。今回のロケット S520-8CN による実験はそのグループに中桐がいたため、このようにデジタル化して保存することが出来た。

主なシーンを取り上げてみる。



写真 2 三鷹光器で製作中



写真 3 黒染めで仕上がった望遠鏡



写真 4 制御部へ取り付け



写真 5 ノーズコーン取付け



写真6 宇宙研での種々の試験



写真7 S520-8CN ロケット本体



写真8 ロケット先端部に取付け



写真9 先端から見たところ



写真10 官制卓に座った筆者



写真11 発射台に載った
S520-8CN 号機

実験中にPIの小平さんの誕生日を向け、ロケット実験成功の前祝をかねてお祝いの会がもたれ、内之浦にいた人たちが集まった。



写真12 実験中に51歳の誕生日を迎えた小平さんを囲んだ実験場の人たち



写真13 発射ドームに据付け



写真14 発射されたロケット